

「御両国珍名産物」（毛利家文庫 34 産業 5 ） ★右下欄参照

いやす  
なおす  
たもつ



文書館資料にみる  
病気・医療・健康

7

医師と人々⑦

## 目医師の話

江戸時代、意外に目を患う人が多かったようで、自藩内に限らず目医師を求めて人々が往来しているようすが少なからず記録されています。毛利家文庫「御両国珍名産物」という産物帳の中に、目医師の項目が立てられていて、そこに目医師の住所が記されていることは、目医師が当時いかに重宝がられていたかを物語っていると思われます。

また、徳山毛利家文庫「御蔵本日記」は、眼病者や目医師など眼病をめぐる人々の出入りや往来のようすをよく記しています。山口に評判の目医師がいたらしく、そこへの往来を求めて申請し許可された記事が少なからず目につきます。往来許可日数は多い場合で 80 日にも及びました。

関西のほか備後や若狭などまで出向いた患者もいました。徳山藩内外の目医師に関する記述は他科の医師に比べて多いといえます。

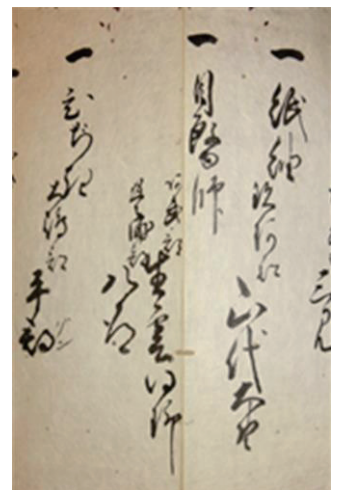
豊後（現大分市）の目医師平山武左衛門が元文 2 年（1737）と寛保

3 年（1743）に富田新町（現周南市）に長逗留したことが記録されており、後者の場合は逗留期間が半年にも達しています。萩の目医師栗山玄厚の弟子である杉山楊玄は、寛政 5 年（1793）逗留の延長願いを出し、計 200 日の眼病治療のために遠石町（現周南市）に滞在しています。

藩領内を通過する目医師に治療を請う場合も散見され、天保 4 年（1833）には京都御室御所の医師松川法橋が徳山で治療したことなどが記述されています。

### 〔筑前の眼科医田原家〕

そして、目立って多いのが筑前国須恵（現福岡県粕屋郡須恵町）の目医師田原家への往来を認めた記述です。そこの往来日数は 100 日にも及び例がほとんどです。この患者は遠く北海道からもやってきており、眼療宿場と呼ばれる患者の宿舎が設けられていたことがわかっています。



「御両国珍名産物」  
（毛利家文庫 34 産業 5）

「紙紬」（玖珂郡山代大野）と「ひぢき」（大島郡平郡）にはさまれて「目医師」（阿武郡生雲田野か・豊浦郡八道）と記されています。田野（たの）・八道（やじ）は地名だと思われます。

「御両国珍名産物」は防長両国の名産物と産地を書き上げたものですが、成立年代は不詳です。

徳山毛利家は、薬を取り寄せるだけではなく、少なくとも3回、徳山領にまでこの田原氏を直接呼び寄せて診療にあたらせています。呼んだ先は前藩主の隠居所、富田御殿でした。呼ばれた医師は田原家6代目養柏と7代目養全。来診は、享和3年（1803）6月8～13日、文化3年（1806）2月15～21日、文政9年（1826）10月8～13日。徳山毛利家文庫

には「御蔵本日記」のほか「富田御殿日記」という史料もあり、両者をあわせ読むと、その診療や接待、礼金等々について大変詳細にわかります。

天保7年（1836）、徳山町の町人が筑前田原製目薬の販売運上銀を納めたという史料もあります。

当該日記には、享和元年（1801）広島眼鏡売りの逗留も記述されています。

山口市赤妻の生目八幡宮には、天保壬寅年（1842）に「所願成就」として「巳之歳男」によって奉納された祈願の額があります。おそらく眼病治癒の祈願でしょう。右方に「種（以下不明）」とありますから、萩方面からはるばる祈願に訪れたのかもしれませんが。



日向延岡領宮崎郡生目村（現宮崎県宮崎市）に鎮座する「生目神社」は古来眼病の神として名高く、山口県内にもいくつか勧請されています（美祢郡若永・美祢郡赤の大岩穴Ⅱ景清洞・萩市明木・上写真の山口市赤妻など）。

一方、藤原景清（一般的に平景清と俗称される）も眼病を癒すとして各地に伝承をのこしており、県内にも周南市の川崎観音にある「景清の目洗い井戸」や先述の景清洞、景清の墓（宇部市棚井）などがあります。おそらく源平合戦の後に源頼朝に捕らわれた景清が、源家の栄達を目にすることを厭うとともに源家への復讐を断念するために自身の両眼を抉ったというエピソードをもとに生じた伝承で、それをもとに生目神社との関係が生じたものと思われる。

日向（現宮崎県）生目村の生目神社の大宮司が開板した景清公の眼病護符。「神詠」として「景清く 照す生目のみづかゞみ すへの世までも曇らざりけり」とあります。  
（小田家文書（柳井市金屋）護符）